

能を切る

「四賢婦人・矢嶋楯子の生涯」

文＝福永無想



第十六回「楯子の洗礼」

日曜日の朝、楯子は教会で牧師の説教を聞いていた。

「イエスはこう申されました。『赦しなさい。さすればあなた方も赦される』と。神に祈りましょう」

楯子は指を組んで十字架に祈った。目を閉じると、愛おしい我が子らの顔が浮かんでくる。治定となも子の顔も見ずに林家を出てしまったこと。幼かった達子に寂しい思いをさせてきたこと。練馬に預けた妙子に、母であることを名乗らないこと。どれも痛く胸に突き刺さる。楯子の頬に幾筋もの涙が流れた。

熊本から便りが届く。兄の源助が病に伏しているという。明治12(1879)年、楯子は7年ぶりに帰郷した。

「兄さま、只今戻りました」
「楯子か、元氣そうで何よりだ」

官吏を辞職し熊本に戻った源助は県会議員となった。郷里のために私財を投じ尽力してきたが、病床の姿には以前のような

威厳は薄れていた。

「末の息子の四郎です。おばさまにご挨拶を」
源助の妻の糸子が、あどけなさが残る四郎を連れてきた。楯子の目に、息子・治定がまだ幼かった頃の顔と重なる。しかし、糸子の顔を見てがく然とした。東京の猿楽町の屋敷で、ひととき共にいた時の糸子とは見聞違うほどやつれていたのである。家の中を見渡すと襖障子、畳替えが長年できておらず、糸子の着る物を見れば、暮らし向きが苦しいことが伝わってくる。

楯子は東京でこつこつと蓄えてきた、25円もの大金を用意していた。自分を支え励まし続けてくれた兄のためならば、全てを差し出しても惜しくはなかった。

「こんな大金を、受け取っていいものか……」
源助はたじろぎながらも、楯子が差し出した封筒を受け取り頭を下げた。楯子はさらに、こう申し出た。

「兄さま。四郎を養子にくださいませんか。私の手元で責任を持つて育ててみたいのです、どうでしょうか」

今の暮らしでは四郎に立派な教育を受けさせることは難しい、そのことをおもんばかつてのことと痛く分かった源助は、楯子の申し出がありがたく、深くうなずくと心の中で手を合わせた。

源助を見舞った後で楯子は、妹・貞子の河瀬家を訪ねた。7年前に貞子夫婦に預けた幼かった達子は、少女になっていた。美しい手や着ている物を見れば、大切に育てられてきたことが分かる。

「典次(※)さん、貞子、なんとお礼を言えばいいの

のか」
「姉さま、私たちも達子がおつてくれて、どんなに励みになりましたことか」

楯子はこれまでの感謝の思いからの金子を包み、達子を引き取りたい旨を伝えた。貞子にすれば慈しみ、預かり育てた達子を手放すことに寂しさはあったが、母親の元で育つことが自然の流れと、渡された金は達子の上京の際に役立てることにした。

その年の11月9日、新栄教会の祭壇の前で、宣教師のデイビット・タムソン氏は楯子に厳かに言い渡した。

「矢嶋さん。父と子と聖霊のみ名により、あなたに洗礼を授けます」

心の中の醜いものや罪が洗い流され、新たに生まれ変わった気がした。楯子はこの時、47歳であった。

洗礼を受け寄宿舎に帰ってきた楯子を、ミセス・ツルは涙を浮かべて抱きしめた。
「今、私は胸がいっぱいでなりません……」

そう言つて声を詰まらせるミセス・ツル。1だったが、彼女はこれまでただの一度も、楯子に入信を薦めたことはなかった。その陰で、楯子の内に秘めたる情熱を神にまで結ばんと、朝な夕なに祈り続けてきたのだ。類つたう、その美しい涙に、楯子の涙腺もまた緩むのだった。

※河瀬典次／横井小楠の門弟。小楠の第二回越前藩招聘に随行するなど秘書的役割を果たす。明治維新後は実業家として、養蚕・織機・製茶業などの殖産興業に尽力した。

※この物語は、矢嶋楯子の資料をもとに描いたフィクションです
※参考文献＝「矢嶋楯子伝」(徳富蘇峰・監修、久布白落実・著/不二屋書房)、「矢嶋楯子の生涯と時代の流れ」(齊藤省三・著/熊日新書)、「熊本のハンサムウーマン」(堤克彦・著/熊本出版文化会館)、「矢嶋楯子伝 われ弱ければ」(三浦綾子・著/小学館文庫)、「明治女性史」(村上信彦・著/理論社)、「まんが四賢婦人物語」(益城町)



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959

開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)

入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)

※()は30人以上の団体割引料金

